



BOOK TALK



編集・発行 海南高校図書館
第30号 2017. 7. 7

英語科の井口です。私は図書館という、独特の紙の香りがするしんと静まった空間が好きです。読書は好きで、本はいつも手元にあります。毎夜寝る前の数分間、電車での移動や病院の待合室で隙間の時間を見つけては本を開いています。読書は自分にとって楽しみであり、発見であり、つらい状況の時には生きるための精神的な輸血にもなり得るものでした。世の中はいつの間にかデジタルの時代となり、書籍も新聞も時代の流れで電子化されているようです。私は本については中身だけでなく紙の質感、活字の書体、タイトルの字、挿絵や装丁すべてトータルで「本」であるような気がします。ですから時代遅れかもしれませんが、個人的には断然「紙の本」が好きです。書棚から取った本の埃をフッと払ってページをめくる瞬間が好きです。

昭和の頃の思い出①

小学生の頃、母親に連れられて週末はよく旧市立図書館に行きました。そこで多くの児童書に出会いました。『ナルニア国物語』のシリーズ、『大草原の小さな家』シリーズ、『赤毛のアン』シリーズなど夢中になって読んでいました。特に大草原シリーズはアメリカの開拓時代を舞台にしたファミリーの物語で、馬車に必要な最低限の家財道具を乗せ、家族で力を合わせて草原に家を建て、何もかも手作りしながら厳しい自然の中を生きていく主人公ローラの自伝です。何も無い時代ですから、ローラはトウモロコシの芯をハンカチで包んでお人形代わりにし、解体した豚の膀胱を膨らませてボール遊びをします。お話もおもしろいのですが、ガス・ウィリアムズの描いた挿絵もまたなんともいえない温かみがあって心に残っています。その頃テレビで海外ドラマとして放映されていたこともあり、テレビと本の2本立てで楽しんでいました。当時それらは翻訳されたものということにはあまり気にせず読んでいましたが、大人になって原書の存在を知り、「せっかくだから読んでみよう！」と洋書専門店の通販で買い求めました。時を経てから同じ物語を再び英語で味わうことが出来ました。



昭和の頃の思い出②

小学校5、6年生の時の担任のN先生は非常に厳しい方でした。私たち児童を大きく包んで育ててくれた恩師です。読書指導、つづり方指導など、今でも授業の一場面を思い出せるほど熱心に指導して下さいました。先生はよく「本を読むと想像力がつくのです。」とおっしゃっていましたがその意味を理解したのはかなり後になってからのことです。叱られた事も多々あり、縮み上がるほど恐かったです。N先生から薦めていただいた本はどれも心に響きました。そして私たちは読書の後はノートをつけるように指導されました。読んだ本のタイトル、作者名、日付、心に残った場面と感想をメモするという簡単なものですが、それは習慣となりました。実は今も読んだ本についてはお気に入りのノートに記録に残しています。そうしないとなんだか読み終わった気がしないのです。

昭和の頃の思い出③

高校時代は太宰治に明け暮れていました。きっかけは忘れましたが、いつの間にか好きになっていました。片っ端から読みました。読む本がなくなると悲しくなり、何度も彼の作品を読み直していました。なぜあそこまで没頭したのでしょうか？なんだか作品というより作家に恋しているような状況でした。この人の気持ちをわかってあげられるのは私だけ！と本気で思っていました。実は大学に行っ

てからもしばらく熱は冷めず、6月19日の彼の命日桜桃忌には多くの太宰ファンとともに三鷹市の禅林寺へサクランボをお供えに行っていました。青森の彼の生家（その頃は斜陽館という旅館になっていた）を訪れ、感慨にふけりました。彼の作品はすべて読みましたが、今はそれら一つ一つを思い出すことが出来ません。今、断片的に思い出せるのは『女生徒』くらいでしょうか。彼の本は今、物置のプラスチックケースの中に入っています…。



昭和から平成へ

大学ではアジア諸国に興味を持ち、リサーチのために本を読むようになりました。大学で学んだことの一つに、批判的なものの見方をする、ということがあります。本や新聞に書いてあることを鵜呑みにしてはいけない、ということです。物事の本質を見極め、流されないためには視野を広げて自分なりのものの見方を作らねばなりません。「疑って読め。」とよく言われました。今のようにインターネットもなく、調べ物は図書館が頼りでした。ゼミの先生から一つのレポートを書くにおいても複数の、特に自分とは意見の違う著者の本を取り上げて読んでおくように指導されました。「これは違う」と感じながら本を読むのはかなりのストレスでした。しかし物事の見方は一つではない、視点を変えて見ればまた違うとらえ方が出来る、そういうところに気づかされました。人から言われたことをすぐに信じてしまう自分にとってこの経験は「自分で考える」訓練になったような気がします。

平成の皆さんへ

さて、若い皆さんに最近読んだ本の中から何冊か紹介したいと思います。1つは

★齋藤孝著『新聞力』筑摩書房2016年

ネットやスマホの時代に新聞？と思うかもしれませんが、総合的な判断力を身につけるために、新聞を活用することがその一助になるのでは？と思います。この本では効果的な新聞の読み方、活用の仕方がコンパクトにまとめられています。本と同じくらい新聞を読むのが好きなので紹介します。そしてもう一冊は、

★岩城けい著『さようなら、オレンジ』筑摩書房2013年

英語という教科指導に携わっていることもあり、異文化に大きい関心があります。著者の岩城けい氏は大学卒業後、オーストラリアに在住し、この作品で第29回太宰治賞・大江健三郎賞を受賞しています。内容の一部を紹介すると――サリマは遠くアフリカにある母国の内戦を逃れ、オーストラリアという「大きな島」へ行き着いた難民です。幼い2人の息子を抱え、スーパーの食品加工場で肉の解体作業をしながら生き延びるためだけに生きてきた彼女は、何より『言葉』を理解しようと、英語を習うことを思い立ちます。――異文化の中で抱える大きな葛藤、女性としての生き方が見事に描かれている作品だと思いました。



最後に

読書は自分にインスピレーションを与えてくれるものの一つです。本は大好きですが、古くからの友人から最近言われた言葉が結構応えました。「本ばかり読んでるけど、自分で考えることをサボってたらアカンで。」うわっ、アイタタタ・・・はい、ホンマにそのとおりです。皆さんには是非とも図書館に足を運んでもらいたいと思います。そこには人類の文化遺産がぎっしり！あなたを励まし、癒やし、そして奮い立たせてくれるでしょう。（英語科：井口智子）